

M上ワールドに行く

秋田駒ヶ岳～乳頭山～岩手山 (2024/3/23-25)

L : M上、D山、H口、(以下会員外) N村、F澤、O西、OVo

秋田駒ヶ岳と乳頭山、岩手山を途中の宿に泊まりながら、つまり“Hut to Hut”という形でスキー縦走するという計画をM上さんが企画した。何か夢みたいな企画だが実際にM上さんが20年前に行なったツアーだそうだ。

送られてきた計画書を改めて地図で確認するがとんでもなく長い移動距離だ。下りはスキーで早いのでそれで何とかできるのだろうが本当にそんなことができるんだろうか。できたら面白いな。とにかく心して掛からねば。

I. 秋田駒ヶ岳

深夜バスでやって来るドンちゃん以外のメンバーは前泊で田沢湖の宿に集まった。まずは駅前の居酒屋で顔見せ会。M上さん、僕、そしてN村さん、ニャン隊長、しいちゃん、その夫でドイツ人のVoさんの4人はいずれもM上さんが以前所属していたLという山スキーの会のメンバーである。飲んで話せばもう山仲間ということで明日からのツアーが楽しみになった。

ツアー初日、ドンちゃんと駅前で落ち合い、ジャンボタクシーで仙岩トンネルまで移動した。今日はここから秋田駒ヶ岳の横岳、男女岳を上り、八合目小屋まで下って笹森山へ上り返し、大釜温泉へと滑っていく行程だ。

8:35、橋を渡ってツアーが始まった。クラストに近い雪面。M上さんを先頭に斜面に取り付くが上りにくく、のっけから思った以上の苦戦を強いられた。

「赤テープがあった所から上ればよかったな」と林道に出た所でM上さんがこぼした。

いったん台地に上がりそこからリッジのような痩せ尾根に行くが、雪庇が怖いので尾根の左をクトーを付けて上がった。

広い台地まで上がると雪の質が良くなった。一本入れた後、土手のようにせせり立つ横長根の斜面に向かって進んで行く。森林限界から横長根の稜線に出る斜面に取り掛かる。斜めに斜めに進み、12:00、先頭に行くニャン隊長が稜線に着くや

「おおー！」と歓声を上げた。続いて稜線まで上がるとそこから秋田駒ヶ岳のひとつ女岳が富士山のような美しい形で聳えていた。右上の欠けたように黒い部分から噴煙が上がっている。いい眺めだ。ここまで上がってきたご褒美のような眺めだった。



横長根の稜線は女岳を囲むカルデラのように続く。進んで行くと女岳の後ろに三角錐の男岳も見えてきた。女の背後に男ありか。

第二展望台の先は大焼砂と呼ばれ地熱と風のせい雪が付かず、登山道にはロープが並行して張られ、その間だけ地面に雪が付いていた。ロープを渡す杭ごとに東からの風でエビの尻尾が伸びていて長いものは1mもある。ストックで叩いても壊れないほど固かった。それらはビールの麒麟のたてがみみたいに見える。下山したらキリンビールだ。

横岳山頂に着いたのは 14:00。シールを外してここから阿弥陀池に向かって滑り下りるのだが、真っ白で斜面がどのようになっているのかわからない。白飛びという状況だった。誰も前に出れず、こういう時はM上さんに頼るしかなかった。M上さんが短い斜滑降で少しずつ下りて行き、それに続く。阿弥陀池小屋まで下り、見返してみると滑るのに面白そうな斜面だったのだが仕方がない。

時間は 14:30 になっていた。

「ちょっとこんな時間だから男女岳と笹森山には行かないで八合目の小屋から登山道下ってバスに乗ろうか」とM上さんが提案した。無論異論は無い。

男女岳の東側の谷筋を下りて行くのだが、先頭に行くM上さんの姿がしいちゃんの目の前で突然消えた。おそろおそろ消えた所まで行ってみると、2m くらいの段差になっていてヘルメットに雪を付けたM上さんが起き上がった。

雪は少し湿り気があり、長い斜滑降で高度を下げる。途中でもう一回M上さんが消える場面があったがみんなゆっくり付いて行った。

15:15、八合目の小屋では学生たちがテントを張って雪訓をしていた。ここから登山道の緩い斜面となるが雪質が良くなり楽しい滑りが味わえた。空が明るくなったところで一本取りバスの時間を確認した。

さらに林道を下って行くと、やがて田沢湖が見えてきて、アルパこまくさに着いたのは 16:35。館内で休憩させてもらい、17:09 のバスに乗って大釜温泉に向かった。

大釜温泉の湯は鉄分を含んだ黄土色の湯で夕飯の秋田の郷土料理と共に一日目の疲れを癒してくれた。



II. 乳頭山

ツアー二日目、今日はこの裏手から孫六温泉経由で乳頭山に上り、滝ノ上温泉に滑り下りた後、対岸の山から東へ向かい小松倉山へ上って網張温泉へと下って行く。

7:45、大釜温泉の裏手から沢沿いに歩き 25 分ほどで孫六温泉。そこでリフトサポートを上げて急登に取り掛かる。

しつこく続く急登が少し緩んだ所で前を歩いていた二人組が休みを取った。挨拶をし僕らが滝ノ上温泉を抜けて網張温泉まで行くと言ったら

「ウチらは笹森山までなんでもう 1/3 くらい来たけれど、アンタらまだ 1/10 も来てないじゃないか」と驚いていた。

再び上りを歩き出す。しばらくしてドンちゃんとその前との距離が開いてきた。

「前がそんなに早くないんだから間開けちゃダメだよ。パーティーは同じペースで歩かないと」とM上さんからムチが入った。

「遅くとも乳頭山に 11 時には着かないと宿に着かないよ。」

一休みした後のドンちゃんは尻を叩かれた馬のように先頭に出てみんなをリードする側に回った。次の一本を取った時に

「いい調子で引張ってるよ」とM上さんから褒めの言葉。アメとムチを使い分ける猛獣使いの姿を見た。

田代平山荘を越えると樹木はほとんど無くなり前方には乳頭山が待っているかのようになっている。天気が良く空は晴れ渡っている。右後方には秋田駒ヶ岳も見える。ああ、僕らはとんでもなく面白いことをやってるんだなあ。

乳頭山の上部はシュカブラの固い斜面となったがクローを付けずに上がって行けた。そして 10:40、乳頭山山頂に着いた。遠くに岩手山が見える。しかし風が出てきたのであまり長居をせずに下ることにする。

シールを付けたままシュカブラの切れる所まで下り、そこでシールを外して滑降モードに切り替えた。前方左にポコッとした 1,428m のピークがあったがその右の斜面をM上さんが下って行った。広く滑りやすい斜面でドンちゃんのテレマークターンもお披露目となった。しかし 1,300m くらいまで下ると急に雪が重くなり、切り替える方の板を取られ僕は転倒してしまった。

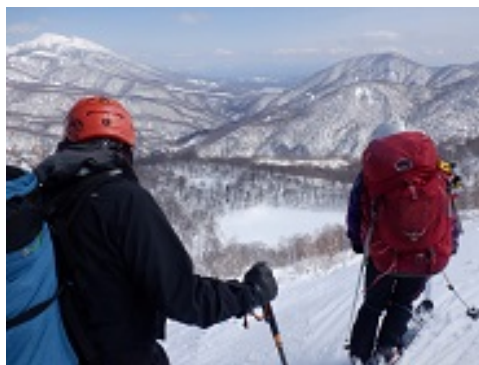
「あんなんじゃまだまだだ」とニヤニヤしたM上さんからかわれた。そして風の無い日当たりの良い雪面に腰を下ろし昼の休憩を取った。

左方向に進路を取って行くと乗りたい尾根との間に沢筋が横切っていた。「やっぱ横着せずに 1,428m のピークに上ってあの尾根を下ってくりゃよかったな」とM上さんがつぶやいた。シールを付けて上り返し向かいの尾根に乗った。

下って行くと下方に雪に覆われた白沼が見えた。しかし手前が切れ落ちている。「雪が雪崩れるといけないんで合図したら一人一人順番に来るように」と言ってM上さんが落ちて行った。後ろからだどう滑って行ったのかわからない。しばらくして合図が聞こえニャン隊長が落ちて行った。続く Vo さんは前の二人とは違って左の方へ行ったらしい。しいちゃんも Vo さんに続いた。切れた端まで出て見ると右へ行った方がなだらかに見えた。それでドンちゃん、N村さん、僕は右の方へトラバースして行った。しかし先頭と違うルートを取ったためそれぞれ雪を崩してしまった。下で集まるとM上さんから注意の指導が入る。

「こういう所では雪崩が起きないように先頭が行った所から同じように下りないといけないよ！」

これも雪山の教えである。



白沼の上に 12:45。これから滝ノ上温泉へと下り、その向かいの小松倉山へと上って行く計画であったがM上さんから提案が出た。

「雪がこんなだから時間が掛かるだろうし、それだったら小松倉山の方に行かないで、滝ノ上温泉から1時間くらい林道歩いてタクシーを呼ぶのはどうか。」

白沼からは尾根筋に登山道が滝ノ上温泉まで続いている。練習とばかりに先頭を任された。コンパスで方向を見ながら尾根を下りて行った。しかし GPS で確認すると途中で一本尾根を間違えてしまったようだ。登山道へは左にトラバースして行く必要があった。しかし沢筋が深くなった所でどう行けばいいかわからなくなってしまった。すると

「あそこから行けるだろう」とM上さんが谷へ下り沢筋を越えて斜面を横歩きで上り出した。

「M上さんて山に対する野生の勘を持つてると思う」としいちゃんが言った。

深い沢筋を越えてからはVoさんがリードしてくれた。GPSで位置を確認しながらルートを探索して行くことで

「久しぶりに山スキーらしい山スキーが出来た」とVoさんは言っていた。

そして14:55、滝ノ上温泉の登山口に下り立った。近くには地熱発電所があり対岸の山肌には雪も無い。

「ははは…、対岸を上ろうとしても雪が無いんじゃない」とN村さんが笑って言った。

葛根田川沿いの林道には雪は無く板を担いで歩かねばならない。M上さんはじめ何人かは靴を履き替えていたが、ゲートまで1時間くらいならこのままでいいやとスキー靴のままで歩き出した。しかし1時間歩いてもゲートには着かない。両足の外側が痛くてたまらずさすがに途中で荷物を降ろして靴を履き替えた。

結局、ゲートのある玄武洞まで1時間45分も掛かった。ありがたいことに網張温泉から迎えが来てくれた。完全に疲れた。そして両足の外側がジンジン痛む。早く温泉に浸かって休みたい。

ここで大きなミスを犯してしまった。消耗していたせいで会の下山連絡担当者に連絡を入れるのを失念してしまっていたのだ。誰も気づかず、下山連絡担当者の方から心配の電話をもらってしまった。これには大反省しきりである。

Ⅲ. 岩手山

ツアー三日目、今日は網張スキー場から犬倉山を越え、岩手山に上って八幡平温泉へと下りる。そして八幡平温泉郷17:33のバスに乗って帰京する計画だ。

網張スキー場の上のリフトが動くのが9:30なのでそれを待って出発。リフトトップからの歩き出しは9:45となった。ここからすぐ犬倉山に上がるが、雪面が固かったのでクトーを付けた。しかしM上さんからは

「ちゃんと地図見た？上がってすぐ下りになるんだからすぐ外さなくちゃならない。クトーを付けずに上がるテクニックも身に付けないと」と指摘を受けた。

犬倉山からシールを付けたまま少し下り姥倉山と黒倉山の鞍部を目指して歩いて行く。

1時間弱歩いた所で硫黄の臭いがしてくると姥倉山の裏手からガスが噴き出していた。さらに進んだ先でM上さんが

「そこにみんな並んで。ここが岩手山の撮影スポット」と言って一本取った。傾いた三角形の岩手山が真っ白に輝いていた。そして谷を挟んだその右には黒く荒々しい鬼ヶ城が天国と地獄の対称かのように聳えている。



黒倉山の右をかすめて進み、天国と地獄を隔てる大地獄谷を上って行く。途中でシールに雪が付くようになりシールワックスを塗った。

右手に見える鬼ヶ城の黒くギザギザした岩肌が近くなってきた。木々に遮られているが岩手山も近づいているはずだ。

樹林帯が薄くなってくると岩手山がもう近くなっていた。

「もう17:33のバスには間に合いそうにないなあ」とM上さんが言ったが、誰も何も言わなかった。岩手山の引力に引かれていた。

1,750m まで上がった所で時間は 14:45 になっていたが岩手山はすぐそこにあり、みんなの気持ちが岩手山に向かっていて。そこに荷物をデポして空荷で上がる。

ジグザグを切りながら上がって行くが斜面の雪が固くなってきた。1,910m まで上がった所でM上さんが板を外した。そして板を置き、ツボ足で斜面を上がり出した。「んっ？」と一瞬思ったがM上さんはルートを作っている。二番手に行くN村さんが「M上さんの足跡を崩さないように上って」と言って続いて行く。

火口部の稜線に出た。稜線は弧を描いて伸び岩手山山頂が見えている。しかし風が強かった。

「風が強いからここまででいいんじゃない」と Vo さんが言ったが既にM上さんは山頂に向かって稜線を進んでいる。ここで待つ人がいるならせめてそれを伝えなくてはいけないので僕は行くことにした。



一步一步山頂が近づく。するとM上さんとN村さんは山頂から引き返して来た。風が強いので山頂で待たずに戻って来たのだ。

僕が山頂に着いたのは 16:00。標高 2,038m というプレートを見てここが山頂かと感激だったが何せ風が強いので長居はせずに引き返す。すると Vo さんもしいちゃん、ニャン隊長と一緒に山頂に向かって来た。

火口部からの下りは上ったルートではなく、下りやすそうな所をM上さんが選んで先導してくれた。しかしそのせいで板を置いた所へ戻るのに少し手間取った。

板を履いて荷物をデポした所に向かうが雪面が固い。斜滑降で刻みながら下りると Vo さんのオレンジ色のスタッフバッグが見えて無事荷物を回収できた。

この時点で 16:55 になっていた。早く滑っても 2 時間は掛かる。当然今日のうちに東京まで帰ることはできない。明日仕事のあるメンバーも二人いたが改めて観念した。とにかく下ろう。

しかし、ここから下が滑りにくい雪に変わっていた。モナカ雪で板を取られてしまいスキーを思うようにコントロールできない。

「こういう時はプルークボーゲンで下りるんだよ」とM上さんが手本を見せるが後続は同じようには滑れない。250m 下るのに 30 分近く掛かった。一本取り、暗くなるのに備えてヘッドレンを用意することにした。

「途中で落っこたさないようにこれでヘルメットに固定しといた方がいいよ」とN村さんがダクトテープをみんなに回してくれた。

この時点で 17:40 になっていた。当初の下山時間より遅れることを下山連絡担当に連絡しておきたい。なにせ昨日迷惑を掛けてしまったのだから。アンテナは立ってなかったが、山の中のどこかで通じたらと願いを込め、岩手山からの下山途中であることと、ビバークの可能性もあるという内容でM上さんがメールを送信してくれた。さあ、明るいうちにできるだけ高度を下げておこう。

18:25、御苗代湖に着いた所で薄暗くなっていた。頭を上げると岩手山がシルエットになっている。ここでヘッドレンを点けた。

この後どうするべきか、状況のみて慎重になければならない。風が無く寒くなかった。そしておぼろながら満月のおかげで真っ暗ではなかった。メンバーはとどまらず下山を続けることで一致した。

この後、少し上りになるのでシールを取り付ける。そこでトラブル発生。ニャン隊長のビンディングがはまらなくなってしまったのだ。地面を平らにしたりみんなでニャン隊長の足元をヘッドで照らしたりして何とかはめることができた。ここからはVoさんが先頭になって再スタート。

GPS でこまめに位置確認をして進んで行く。Voさんは崖マークの所も巧みに回避してくれた。薄暗い森の中、順番にザザーッ、ザザーッという音を立てスピードを殺しながら下りて行く。神経が研ぎ澄まされるように冴えている。Lのメンバーはこうした状況にも慣れていいのか落ち着いている。僕はスキーでヘッドなんて初めてなので何の役にも立ちやしない。せめて迷惑を掛けないようにしなければ。

19:30、一本取った所でM上さんがスマホを見ると au だけアンテナが立っていて先ほどのメールが送られていることが確認できた。下山連絡担当者からも返信があってひとまず安心した。

「ここからはもう後下るだけだからシール外してもいいよ」とM上さんが言ったが、他のメンバーは制動が効くようにシールを付けたまま下りようと反対した。

GPS のおかげとは言え、Voさんのルート工作は的確であった。相当なストレスだったと思うが持ち前のゲルマン魂を発揮してくれた。登山道に出るために沢を渡らねばならない時も勇気と慎重な行動で導いてくれた。そのVoさんはM上さんのことを“先生”と呼び、迷った時は相談していた。そうした精神的な支えもあったのだろう。そんな風にパーティーはまとまっていた。

一服峠の標識が見えた所で

「みなさん、素晴らしいものを見つけました」とVoさんが一際大きな声を上げた。「トレースがあります。」

下から上がって来たらしいツボ足の跡が付いていた。これを辿って行けば間違いなくいい所へ下山できる。

時間は 23:00 になろうとしていた。

「下まで行ったはいいが、その後どうするか。八幡平温泉に泊まるか、あるいは盛岡まで出るんでもタクシー呼ばなきゃどうにもなんないよ」とM上さんが気が付いた。

そこでドンちゃんがダメ元でタクシー会社に電話をしてくれた。果たしてこの時間で電話に出してくれるか心配だったが、相手は電話に出してくれた。

「あのネ、僕たち今山から下りてる最中なんですけどネ、…」

僕らが道に出るまでまだ2時間近く掛かるかもしれない。それも話した。

「本当は営業時間は24時までらしいんですけど、それじゃ可哀そうだと運転手さんが言ってくれて、下まで来て電話したら迎えに来てくれるって言ってくれました。」

よかった。相手もあることだし、できるだけ早く下りて行きたい。

「彼の喋り方は東北の人の心を打つ喋り方だね」とN村さんが言った。

県民の森から岩手山へ続く登山道が割りと広く、なだらかだったのも幸いだった。0:40、無事に県民の森の登山口に到着した。運転手さんからわかるようにヘッドを点けたまま待機しジャンボタクシーでピックアップしてもらった。こちら方面の運転手さんではあったが、ご厚意で盛岡駅まで移動させてもらった。盛岡駅前のビジネスホテルに着いたのは午前2時半近くになっていた。

今回の行程は20年前にM上さんのアブラが乗りに乗っていた頃、そして雪の状態がよかった頃だからできたビッグツアーだったのかもしれない。でもみんなそれぞれ浪漫を持って集まった。

時間オーバーなど周りに心配を掛けてしまったのは申し訳なかった。けれど、安全を第一にパーティーが信頼感でひとつに強くまとまっていたことは伝えておきたい。その大切さを実感したかけがえのない山行であったことも。

(H口記)